

附 編

竪穴系横口式石室小考

一筑前地方を中心にして一

土 井 基 司

はじめに

横穴式石室の型式学的研究は尾崎喜左雄と白石太一郎によって本格的に始められた⁽¹⁾。須恵器の編年的研究が未発達だった当時においては、古墳時代後期を理解する手段として最も重要なものの1つだった。しかし、須恵器をはじめとする遺物の研究の進展とともに、その比重は次第に低下していき、研究もしばらく停滞した様相を示していた。ところが近年、横穴式石室への関心が高まってきて、地域別研究が盛んになってきた。その中でも北部九州では早くから横穴式石室の研究が進んでおり、特に地域的特性からその導入についての研究が盛んである。いわゆる「竪穴系横口式石室」や初期の横穴式石室の型式変化、構造及び源流の問題などがおもに論じられている。しかし、未だ竪穴系横口式石室や初期横穴式石室の定義については、大まかには一致しているものの完全には定着していない。その原因は、どの属性を重視するか研究者ごとに異なることにある。やはり、どの属性が最も有効かを総合的に検討して分類しなければならないだろう。北部九州での混乱は、韓国での研究状況と相まって、その源流の問題を複雑にしている。また、日本国内での系譜問題についても、その混乱がそのまま他地域に反映されている。問題の解決には、各々の地域での各石室形式の厳密な定義が前提条件となろう。さらに、近年盛んな石室の型式学的検討を行うためにも、形式の設定が重要な問題になると考える。本論では、その基礎作業として、先学の研究を参考にしながら、まず北部九州の竪穴系横口式石室の定義について新しい案を提出し、横穴式石室の型式学的研究への第一歩としたい。

研究史

九州地方の横穴式石室については早くから注目され、樋口隆康や小林行雄によってその導入が畿内に先行することが指摘されていた⁽²⁾。しかし、当時の資料的制約もあって、その関心は丸隈山古墳や横田下古墳などのいわゆる「大陸系」の石室に向いていた。それに対して白石は、竪穴系横口式石室を含む「特殊な横穴式石室」に注目し、これらを従来の伝統的墓制に横穴式石室のアイデアを取り入れたものとして位置づけ、5世紀代における畿内とは異なった古墳文化の変容を表すものと評価している⁽³⁾。その後、調査例の増加とともに、特殊な墓制とみられがちだった竪穴系横口式石室に対するこのような積極的評価は定着していった。また、賀川光夫と小田富士雄は、この種の石室に「竪穴系横口式石室」という語を初めて使用し、現在で⁽⁴⁾

はこの名称に統一されている。しかし、歴史的評価と名称の統一にも係わらず、その定義についてはまだ統一されているとはいえない。以下その状況を概述する。

山中英彦は、初期の横穴式石室を「大陸系横穴式石室」と「竪穴系横穴式石室」にわけて、大陸系に対して竪穴系が相違する点として、明確な羨道を持たない、天井石が石室床面にほぼ平行している、側壁が割石小口積みで施朱されることが多い、墳丘の上部に構築される、などを挙げている⁽⁵⁾。前の2点はその後も継承されていく指摘であるが、後の2点は必ずしも両者を分ける基準とはなり得ない。尚、大陸系横穴式石室の標式として丸隈山古墳や横田下古墳を挙げている。ついで柳沢一男は、狭長なプラン、羨道が無い、側壁が割石小口積みや塊石積み⁽⁶⁾を原則とする、閉塞はすべて横口部で行う、と形態上の概念を規定している。特に羨道の有無を最も大きな違いとしている。しかし、条件付きながら前壁や楣石を持つものも竪穴系横口式石室に入れたため、その定義が曖昧になり、初期の横穴式石室のほとんどがそのなかに含まれることになってしまった。その結果、竪穴系横口式石室の位置づけがかえって不明瞭なものになっている。その後柳沢は、竪穴系横口式石室の概念上の混乱は、そのなかの位相の違いを考慮しないことから生じるとして、A型とB型の2つのレベルに分類した⁽⁷⁾。前者が大形古墳、後者が小形古墳に採用され、それぞれ別個の変遷過程を辿ると考えた。初期の横穴式石室全体を捉える上での視点としては優れたものであったが、定義上の曖昧さは残されたままであった。さらに柳沢は、後述する蒲原の説を受けて、鋤崎古墳、丸隈山古墳の調査報告中などで前説を大幅に修正した⁽⁸⁾。つまり、B型石室のみを竪穴系横口式石室とし、A型石室を北部九州型とした。その結果、老司古墳3号石室は竪穴系横口式石室の範疇からはずしている。

一方、小田富士雄は九州の横穴式石室について「竪穴系横口式石室」「横口式家形石棺・石棺式石室」「横穴式石室」の3つにわけている⁽⁹⁾。「横口式家形石棺・石棺式石室」は江田船山古墳のような横口式家形石棺を直接封土に埋めたものや石人山古墳のような覆屋ふうのものを指している。「横穴式石室」はさらに「小坂大塚タイプ」、「横田下タイプ」、「箱形石室」にわけている。竪穴系横口式石室には老司古墳3号石室とそれに後続する丸隈山古墳をふくめているが、さらに発展した釜塚古墳は横穴式石室と捉えている。また、小形古墳に採用される竪穴系横口式石室も同様に横穴式石室へと移行していくとして、竪穴系横口式石室の定義を狭義に行うべきだとのべている。蒲原宏行も竪穴系横口式石室をより精密に定義した上でその展開を検討すべきだと主張し、前壁・楣石の有無を大きな指標として竪穴系横口式石室を定義している⁽¹⁰⁾。そして、前壁を持たない構造的な限界によって玄室高が1.4mをこえないこと、主軸平行葬のため玄室幅が1.4mをこえないことを基本的特徴として指摘している。しかし、老司古墳3号石室は例外的にその中に含めている。

土生田純之は初期の横穴式石室についての諸説をまとめている⁽¹¹⁾。基本的には小田の論を踏

襲しているが、九州での横穴式石室の受容のあり方とそのほかの地方の受容のあり方の共通性を指摘しており興味深い。つまり、首長墓系統に初めて横穴式石室が採用されその影響下で小形古墳にも採用されていくという現象が関東地方でも認められると述べている。森下浩行は、新たな視点から整理を試みている⁽¹²⁾。まず、初期の横穴式石室を九州型と畿内型に大別し、九州型をさらに北九州型と肥後型に分類したうえで、北九州型と畿内型はそれぞれA類とB類に細分している。北九州型B類(竪穴系横口式石室及びその系譜をひく石室)については、A類の二次的な影響によって在来の小形竪穴式石室に横口部を取り付けた結果成立したと考えているが、そのほかのものはそれぞれ朝鮮半島南部からの多元的導入を推測している。しかも最初の導入時だけでなく、数度にわたっての影響を想定している。九州以外から出されたこれらの論考はいままでの研究をさらに進展させる上で注目すべきものだろう。

最後に、林日佐子は朝鮮半島南部の「竪穴系横口式石室」との関連から日本の竪穴系横口式石室を考えようとして型式分類しているが⁽¹³⁾、現在のところ二者を積極的に結び付ける材料はなく、小田が言うように類似現象と捉えるべきだろう⁽¹⁴⁾。ただし、従来混同して用いられてきた羨道の概念について、明確に天井石を架構しないものは羨道とすべきでないとしたのは画期的であった。

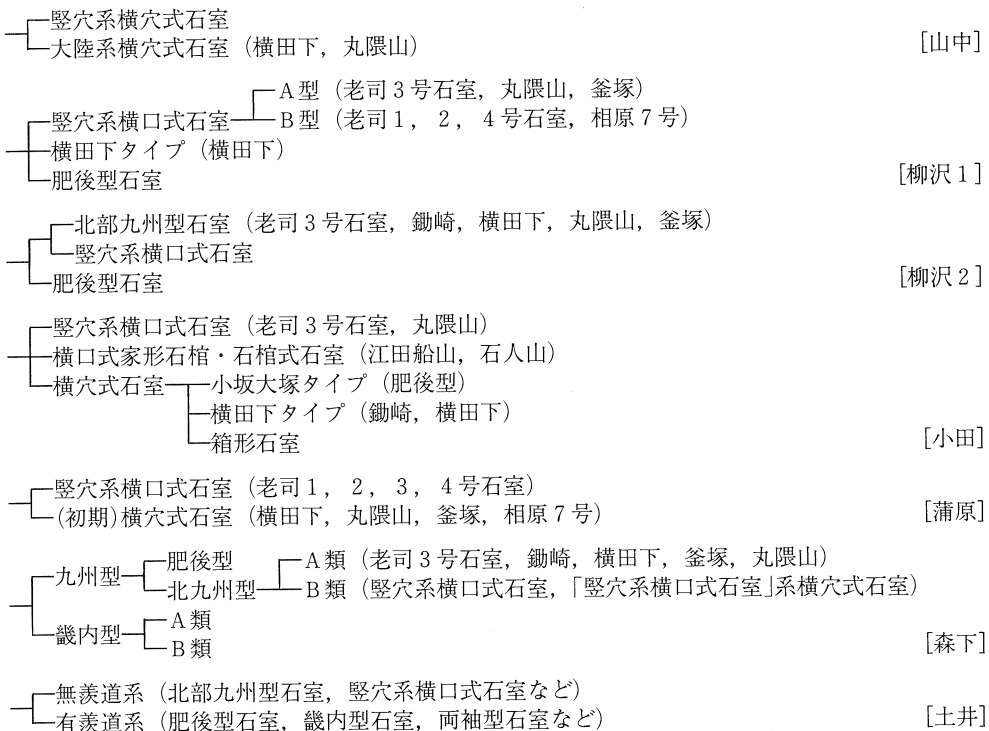


図 1 各研究者の石室分類

さて、以上の先学の説をまとめたのが図1である。ここで問題になるのは第1に老司古墳3号石室、丸隈山古墳の帰属だろう。柳沢、森下は2つとも竪穴系横口式石室にileず、蒲原は老司古墳3号石室のみ含み、小田は両者とも竪穴系横口式石室と考える。筆者は、柳沢、森下の説を採る。なぜなら、両者とも構築技術からみて鋤崎古墳や横田下古墳、釜塚古墳につながっていくが、小形古墳に採用されている竪穴系横口式石室にはつながっていないからだ。平面形からいっても、幅広な老司古墳3号石室などと狭長な他の竪穴系横口式石室とでは違いが大きすぎる。第2は分類の方法に関する問題だ。小田の「横口式家形石棺・石棺式石室」をのぞけば、分類単位にそれほどの違いはない。大きな相違点は分類単位の間関係だ。柳沢は北部九州型と竪穴系横口式石室を合わせて肥後型に対応させ、森下はそれをさらに畿内型に対応させている。小田は北部九州型や肥後型を合わせて竪穴系横口式石室に対応させている。小田は竪穴系横口式石室は横穴式石室にいたる過渡的なものという点を重視しているが、構造的差異、その成立の様相を考えると柳沢の分類の方が妥当に思える。しかし、肥後型石室は、羨道を持っている、方形プランである、などの点から、むしろ畿内型の一部との類似性の方が強いと思われる⁽¹⁵⁾。

以上の考えを図1の最後にまとめている。以下ではこれに基づいて具体的な資料操作を進める。尚、資料操作に当たっては、筑前地方をおもに取り上げながら北部九州の初期横穴式石室について考えていき⁽¹⁶⁾たい。

横穴式石室の分類

竪穴系横口式石室を他の横穴式石室から分離して定義する場合、比較する対象は2つある。1つはその他の初期横穴式石室（北部九州型石室）、もう1つはいわゆる通有の横穴式石室（両袖型石室）である。また研究史から見て、竪穴系横口式石室の特徴は、狭長なプラン、羨道が無い、前壁が無い、横口部を板石で閉塞、などがあげられる。このうち、狭長なプラン、前壁の有無は前者と区別する特徴で、羨道の有無や横口部の閉塞法は後者と区別する特徴である。本論では前述したように羨道の有無をもって大別し、それから細分するという方法を採用。つまり、初期横穴式石室と両袖型（横穴式）石室にまず大別し、それから北部九州型（初期横穴式）石室と竪穴系横口式石室を分離することにする。分類の方法としてはいわゆる属性分析を用いる⁽¹⁷⁾。

①初期横穴式石室の抽出

羨道の有無と閉塞法を主要な属性と考え、それと他の属性（袖の構築法、墓道、段）との相関関係を求めて分類をおこなう。

羨道（図8参照）

本論でいう羨道は、林が言ったように⁽¹⁸⁾、前庭側壁とは区別して、天井を架したもののみを指す。さらに玄室入口にのみ天井石を架したようなものは指さない。例えば、鋤崎古墳、横田下古墳のいわゆる羨道は、玄室入口にのみ天井石を架していると考えて、羨道には入れない。鋤崎古墳の石室は、長大な掘り方のなかに石室を構築している点で竪穴式石室の構築法に近く、玄室入口前に広がる石組はむしろ石室小口壁の一部を取り除いた結果であると考えられ、道ではなく入口と捉える方が合理的だろう。釜塚古墳の場合も、玄室入口の天井石が単に外側にはみ出ただけと考えて羨道には含めない。以上の定義にしたがって、羨道のあるものと無いものの2つに分類する。

閉塞法（図8参照）

I類 横口部に板石を立てて閉塞するもの。1枚の板石を用いるものをI a類、複数の小形の板石を数段に分けて立てかけるものをI b類とする。I b類には板石の背後に塊石を積んで支えるものを含む。

II類 塊石で閉塞するもの。

袖の構築法（図8参照）

0類 袖部を形成しないもの。

1類 板石小口積み、塊石積みで袖部を形成するもの。板石小口積みを1 a類、塊石積みを1 b類とする。

2類 板石を立てて袖部を形成するもの。その上に数段の石を乗せたものが多い。

3類 おおぶりの石を立柱状に立てて袖部を形成するもの。その上に2, 3段積み上げて天井石をおくものと、直接天井石をおくものがある。

4類 おおぶりの石を2, 3段横積みするもの。

墓道（図8参照）

0類 墓道が接続しないもの。

1類 墓道が斜めに上がって行くもの。

2類 墓道が水平に続き墳丘端にいたるもの。

段（図8参照）

段の有無で分類する。

上記の各属性の分類について、羨道は無→有、閉塞法はI→II、袖の構築法は0・1→2→3・4、墓道は0→1→2、段は有→無という変化の方向を研究史及び石室構造の発達の方から想定する。以上に基づいて相関関係をとったのが図2である。まず羨道と閉塞法の相関関係から見ると、いくつかの例外をのぞいて左上と右下にわかれている。また、羨道、閉塞法と

羨 / 閉	I a	I b	II
無	24	40	1
有	1	1	94

羨 / 墓	0	1	2
無	12	56	57
有			205

羨 / 段	有	無
無	86	45
有	1	221

羨 / 袖	0	1 a	1 b	2	3	4
無	7	6	14	46	49	14
有				8	167	41

閉 / 墓	0	1	2
I a	3	9	4
I b	1	18	23
II	1		28

閉 / 袖	0	1 a	1 b	2	3	4
I a	3	3	3	7	5	3
I b	1	3	5	10	16	11
II	1			2	76	15

閉 / 段	有	無
I a	20	5
I b	28	13
II	1	94

図2 各属性相関表（1）

その他の属性との相関関係を見ると、羨道有と羨道無とは違った特徴をしめしており、Ⅰ類とⅡ類とでも同様である。このことは羨道と閉塞法が主要な分類の基準たりうることを示すと同時に、さきに想定した変化の方向の有効性も保証している。つまり、筑前地方の横穴式石室は、羨道がなく板石で閉塞する古式のもの＝初期横穴式石室と、羨道があり塊石で閉塞する新式のもの＝両袖型（横穴式）石室の2つに分類することができるわけである。

②初期横穴式石室の分類

①のようにして初期横穴式石室が抽出されたが、次にそれを分類して竪穴系横口式石室を取り出し定義する。方法は①と同様に各属性間の相関関係を求めてそれをもとに分類する。平面形と前壁の有無を主要な属性として取り上げ、そのほかに袖の構築法、墓道、段を取り上げる。

平面形（図3参照）

平面形の分類にあたっては玄室比と玄室幅を参考として用いた。玄室比は（左側長＋右側長）／（奥幅＋前幅）で計算した。縦軸に玄室比、横軸に玄室幅をとって点をおとしたのが図3である。点の分布を見ると、幅1.9m以上で玄室比1.0～2.2付近のもの、幅1.2m以上で玄室比1.0～2.5付近のもの、幅1.2m以下で玄室比1.7以上のもの、の3つに分かれる。これを仮に順にA群、B群、C群と名付ける。A群は大きくて幅広なので幅広プラン、B群は小さくて幅広なので短小プラン、C群は小さくて細長いと言うことで狭長プランといいかえることができるだろう。尚、幅1.6～1.7付近で大きく上に外れた点があるがこれはB群にいれておく。

前壁（図8参照）

玄室入口上部に、石材を積み上げて壁を構築したものを前壁と呼ぶ。鋤崎古墳や横田下古墳

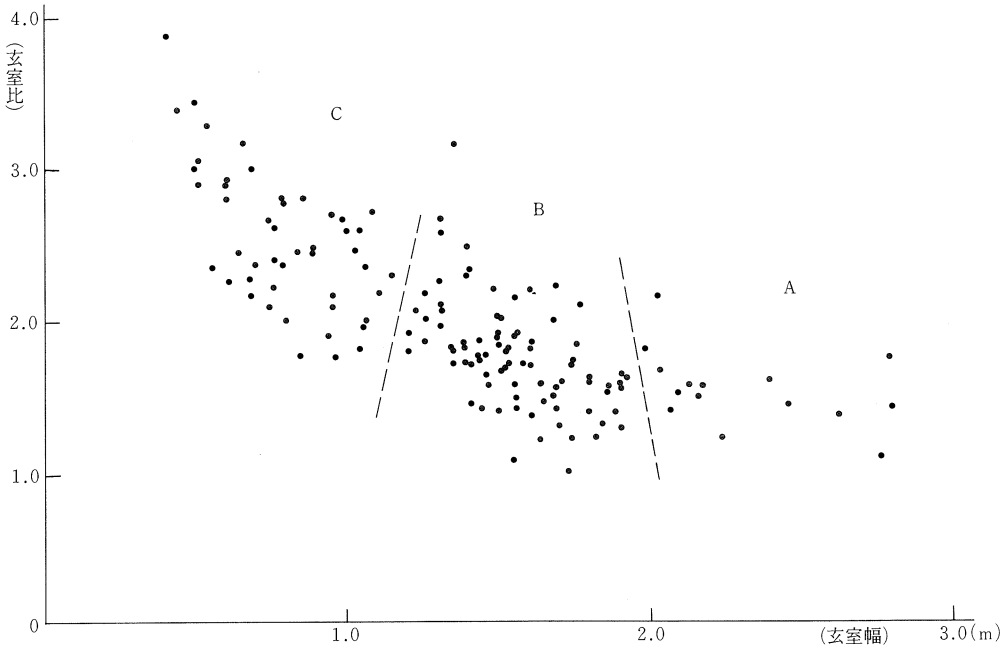


図3 平面形の分類

も僅かだが玄室入口の上に石材が積まれており前壁有りと見なす。このような基準で前壁の有るものと無いものに分類する。

袖の構築法、墓道、段は①に同じ。

以上の分類にしたがって相関関係をとったのが図4である。平面形と前壁の相関関係を見ると、A群とB群が前壁有、C群が前壁無にはほぼ対応している。C群には前壁有がかなり含まれているが、この種の小形の石室で天井石まで残っているのは非常に少なく、これらがはたして例外的なものとして捉えられるかどうかは不明である。一応ここではC群は前壁無に対応するとしておく。次に平面形、前壁と他の属性の相関関係を見ると、A群、B群、C群でそれぞれ対応の仕方が異なる。蒲原は前壁の有無を重視して竪穴系横口式石室を抽出したが、この種の石室で上部まで残っているものがほとんど無いことを考えると、個別の石室をどう認識するかという点で問題がある。したがって、以上の結果から前壁の有無も重要な指標として考慮するが、平面形を最も重視して分類を行い、A群を北部九州型(初期横穴式)石室A類、B群を北部九州型石室B類=無羨道型(横穴式)石室、C群を北部九州型石室C類=竪穴系横口(型横穴)式石室と名付ける。

これまでの検討により筑前の横穴式石室は図5のように分類される結果となった。もう1度竪穴系横口式石室についてのみ説明すると、羨道がなく、板石を用いた閉塞を行うもので、幅1.2m以下、玄室比1.7以上の前壁の無い石室ということになる。その特徴としては、段を有し、

平 前	無	有
C	8	4
B		32
A	1	7

平 墓	0	1	2
C	10	20	6
B	1	32	47
A	1	4	4

平 段	有	無
C	32	7
B	44	38
A	10	

平 袖	0	1 a	1 b	2	3	4
C	7	6	11	24	3	
B				21	41	14
A			3	1	5	

前 墓	0	1	2
無	1	15	1
有		16	24

前 袖	0	1 a	1 b	2	3	4
無	1	1	2	6		
有	1	3	2	12	13	7

前 段	有	無
無	8	4
有	19	18

図 4 各属性相関表（2）

— 北部九州型（初期横穴式）石室 —
— （北部九州型）両袖型（横穴式）石室 —
— A 類（老司 3 号石室，鋤崎，丸隈山，釜塚）
— B 類＝無羨道型（横穴式）石室
— C 類＝竪穴系横口（型横穴）式石室

図 5 横穴式石室の分類

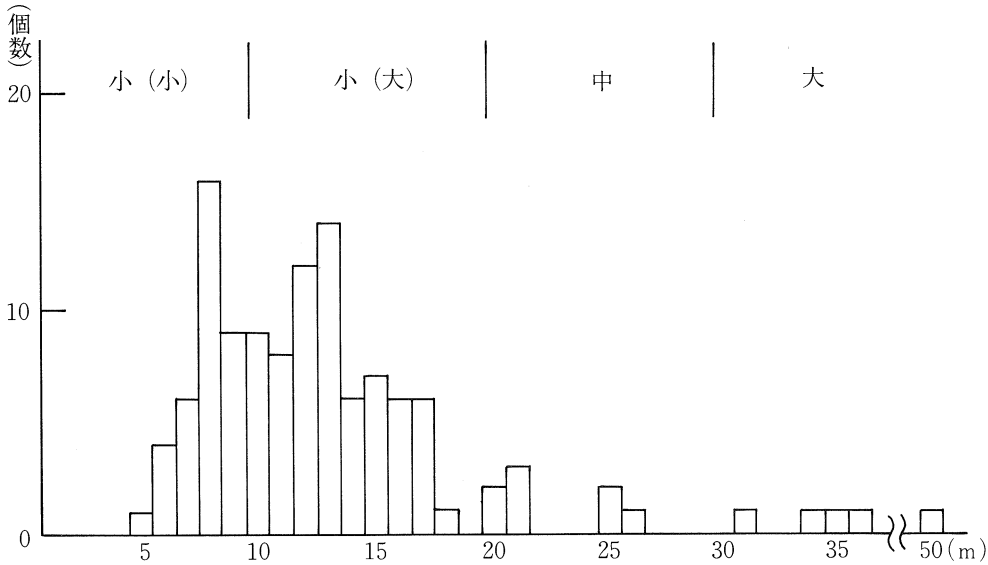


図 6 円墳の大きさ

墓道は斜めにはいるようになっているのが一般的で、塊石積み（板石積み）あるいは板石を立てて内側に突出させて袖部を形作るものが多い、などが挙げられる。

まとめ

上述のようにして竪穴系横口式石室をはじめとする初期横穴式石室が分類されたわけだが、それらの各石室群が全体の中で占める位置について若干考えてみたい。

柳沢は前述のように初期横穴式石室をA型（北部九州型）とB型（竪穴系横口式石室）にわけ、その差を階層差に求めた。⁽¹⁹⁾つまり、A型は前方後円墳や大形円墳に、B型は中小古墳に採用され则认为した。本論ではA型はA類、B型はB類、C類にだいたい対応する。そこで各石室群とそれが採用される古墳の墳形、墳長との関係を見る。筑前地方の該期の円墳の大きさについて度数分布をとると（図7）、約30m以上が大形、20m前後～30mが中形、17.8m以下が小形というふうに大別でき、さらに小形は10mぐらいをさかいに2グループにわかれる。これを基に墳形・墳長を前方後円墳、大形円墳、中形円墳、小形円墳（大）、小形円墳（小）の5段階にわけ、各石室群との対応関係を見ると、図7のような結果になる。これを見ると、大枠では柳沢のいうような関係が成り立つといえる。A類は前方後円墳と大形円墳、B、C類は中、小円墳とはほぼ対応している。大、中円墳の部分はB類とA類で若干重なっているが、墳丘の大きさは各地域ごとで相対的に変わってくるので、大きさを単純に比較できない面もあるだろう。さて、初期横穴式石室にみられるこのような階層差は、両袖型石室になっても基本的には存在する。⁽²⁰⁾また横穴式石室採用前の竪穴系墓制の段階でも存在する。⁽²¹⁾このことは横穴式石室の採用によっても古墳時代の基本的社会体制、墓制によって社会関係を象徴させる体制というものに大きな変化はなかったことを表している。この時期は古墳文化がかなり変質していて、各地で地域性が現れてくることも考慮すると、その地域性の1つとして横穴式石室が北部九州に一般的に採用されたと考えることもできる。そう考えると、北部九州型初期横穴式石室の採用とその広範囲にわたる分布が、畿内地方を中心とした体制からの離脱＝九州連合政権的なものには直接にはつながっていかないように思える。もっとも、横穴式石室の分析だけでその正否を語ることは不可能なのでここではこれ以上ふれない。

B類とC類については、傾向としては小形（大）と小形（小）にそれぞれ対応するが、小形（大）と小形（小）が判然と分離できないことを考えると、階層差と考えるには若干無理があるように思う。むしろ、竪穴系横口式石室が前壁を持つと同時に法量が増大して、継続する墓制へと変化したと蒲原

墳形 \ 石室形式	A	B	C
前方後円墳	6		
大形円墳	1	1	
中形円墳	3	4	
小形円墳（大）		47	10
小形円墳（小）		18	24

図7 石室形式と墳形

が考えたように、B類とC類の関係を時間的変化として捉えたほうがいいだろう。墳丘の大きさの違いも、石室の法量の増大の結果と考えれば納得がいく。ただし、C類からB類へとスムーズに変化するかどうかは明らかではない。蒲原や森下の研究成果を見ると、2つの石室群の共存する期間はかなり長期間あるようだ⁽²²⁾。しかし、土生田が指摘しているように、古墳の年代、特に横穴式石室の年代を決定するに当たってはかなり慎重な手続きが必要だ⁽²³⁾。それを考慮して個々の石室の年代を決定し、それから各石室群の存在期間を推測しなければならないだろう。今回は、力量不足で個々の石室の年代について再検討を行うにはいたらなかったので、B類とC類の関係については今後の課題とする。

ところで、北部九州型石室B類と両袖型石室の各属性の特徴を比べてみると、かなり似た状況を示していることが図2と図4からわかる。このことは、B類がその最終段階において、両袖型石室の特徴のうち羨道以外のほとんどの特徴を備えていることを意味している。つまり、両石室群の技術的連続性を強くうかがわせる。ところが、羨道の付設や閉塞法の違いは、全く異なった石室との印象を与える。これは、羨道を持った他の石室からの影響を絶えず受けながら、限りなく両袖型石室に近づき、技術的には両袖型石室の築造が可能だったにもかかわらず、なお中、小古墳に北部九州的伝統を存続させる意識が残っていたことを推測させる。それが後期群集墳の形成の開始とほぼ同時期に両袖型石室に変化するのは、2つの事象との間になんらかの関連性を感じさせる。首長層への両袖型石室の採用の影響を受けて、中、小古墳でも採用されるようになって考えられるが、それが全国的に普遍的な群集墳と関連するのであれば、首長層でのその採用も、磐井の乱などの個別の事件と関連させて考えるより、全国的な現象の中で理解するのがよいだろう。例えば、古墳文化の再整理を目的として、石室形式の統一が全国的に行われたのではないかと考えられる。

以上、竪穴系横口式石室の定義をおこない、それを基にして北部九州の初期横穴式石室について若干の考察をおこなってきたが、当初の構想に反しどれも中途半端で、課題だけが数多く残った。今後、本論を基礎として研究を進め、それらを1つずつ解決していきたいと思う。

	古 墳 名	羨道	閉塞	平面	前壁	袖	墓道	段	報
1	鋤崎古墳	無	I a	A	有	1 a	1	有	1
2	丸隈山古墳	無	I a	A	—	1 a	1	有	2
3	釜塚古墳	無	I a	A	無	2	1	有	3
4	浦谷C 1号墳	無	II	C	無	0	0	—	4
5	浦谷I 1号墳	無	—	C	—	1 b	1	有	4
6	浦谷E 3号墳	無	I a	C	無	2	1	有	4
7	宇美岩長浦4号墳	無	I b	B	—	3	1	有	5
8	相原7号墳	無	I b	B	有	2	1	有	6
9	三郎堂の上2号墳	無	I b	B	有	4	2	無	7

図8－a 石室一覧表

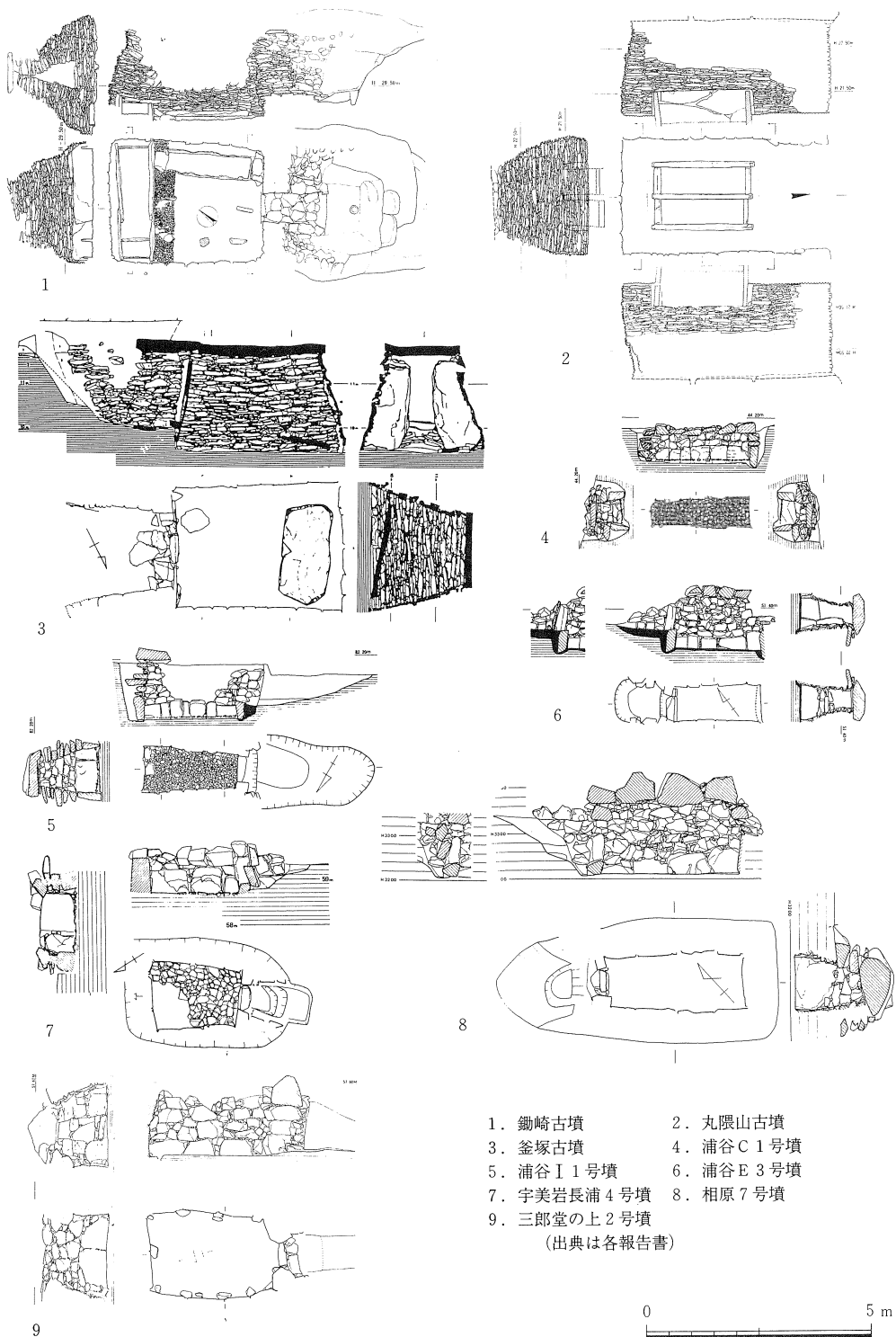


図8-b 各石室実測図 (縮尺1/150)

本論は、1987年度修士論文として九州大学に提出したものの一部を大幅に修正して書き上げたものである。論文作成にあたって、岡崎敬、横山浩一、西谷正、藤尾慎一郎の各先生がたをはじめ、考古学研究室の皆さん、なかでも郭鍾喆、尹煥、宮井善朗、古野徳久、溝口孝司、中園聡、太田睦の各氏（当時）、及び、柳沢一男、橋口達也、田崎博之、吉留秀敏、山田元樹の各氏には、日頃から多大な御指導、御教示をいただいた。また、近藤義郎先生、新納泉先生には、本論をまとめるにあたって、諸々の御助言をいただいた。末筆ながら記して篤く感謝いたします。

註

- (1) 尾崎喜左雄 1962 「横穴式石室平面図形の企画」『考古学雑誌』第48巻第4号 考古学会
1966 『横穴式古墳の研究』 吉川弘文館
白石太一郎 1966 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考—河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として—」『古代学研究』第42・43合併号 古代学研究会
- (2) 樋口隆康 1955 「九州古墳墓の性格」『史林』第38巻第3号 史学研究会
小林行雄 1961 「中期古墳文化とその伝播」『古墳時代の研究』 青木書店
- (3) 白石太一郎 1965 「日本における横穴式石室の系譜—横穴式石室の受容に関する一考察—」『先史学研究』5 同志社大学先史学研究会
- (4) 賀川光夫・小田富士雄 1962 『七双子古墳群』大分県文化財調査報告書第8集
- (5) 山中英彦 1965 『稲童古墳群第二次調査抄報』 蔵内古文化研究所
- (6) 柳沢一男 1975 「北部九州における初期横穴式石室の展開—平面図形と尺度について—」『九州考古学の諸問題』 福岡考古学研究会
- (7) 柳沢一男 1982 「堅穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻 森貞次郎先生古稀記念論文集刊行会
- (8) 柳沢一男 1984 「福岡市鋤崎古墳の横穴式石室」『月刊考古学ジャーナル』No.238 ニューサイエンス社
1984 『鋤崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集 福岡市教育委員会
1986 『久隈山古墳Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集 福岡市教育委員会
1989 「四、古墳の変質」『古代を考える 古墳』 白石太一郎編 吉川弘文館
- (9) 小田富士雄 1980 「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座』第4巻 学生社
1986 「Ⅳ、古墳時代」『図説発掘が語る日本史』6 九州・沖縄編 横山浩一編 新人物往来社
- (10) 蒲原宏行 1983 「堅穴系横口式石室考」『古墳文化の新視角』 古墳文化研究会編 雄山閣
- (11) 土生田純之 1983 「九州の初期横穴式石室」『古文化談叢』第12集 九州古文化研究会
- (12) 森下浩行 1986 「日本における横穴式石室の出現とその系譜—畿内型と九州型」『古代学研究』第111号 古代学研究会
1987 「九州型横穴式石室考—畿内型出現前・横穴式石室の様相—」『古代学研究』第115号 古代学研究会
- (13) 林日佐子 1982 「日本と朝鮮における堅穴系横口式石室」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ 森浩一編 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- (14) 小田富士雄 1966 「Ⅲ、古墳文化の地域的特色 2. 九州」『日本の考古学』Ⅳ古墳時代上 近藤義郎・藤沢長治編 河出書房
- (15) 羨道の概念は後述する。

- (16) 後で述べる北部九州型石室A類については、筑前地方だけでは資料数が不足するので、周辺地域のものも含んでいる。
- (17) 溝口孝司はこのような方法に対して、最初に提起した田中良之を尊重し「田中の方法」と名付けたが、これは田中の意図を忠実に後継したもののみ使用されるべきだと考える。本論では田中の意図からかなり逸脱しているような気がするので、あえて「田中の方法」とは呼ばない。
- 溝口孝司 1987 「土器における属性伝播の研究－凹線文の発生と伝播－」『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論文集』中 同朋社出版
- 田中良之 1982 「磨消縄文土器伝播のプロセス－中九州を中心として－」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上 森貞次郎先生古稀記念論文集刊行会
- (18) 註13に同じ。
- (19) 註7に同じ。
- (20) 大形古墳と小形古墳の石室を比較すると、大きさはもちろん違うが、初期の段階では大形古墳のものは極端に玄室高が高い。また、大形古墳には複室、小形古墳には単室が多い。
- (21) 山中英彦と児玉真一は、先行する竪穴式石室をいくつかの階層に分類し、それが竪穴系横口式石室に継承されると指摘している。
- 山中英彦 1974 『東宮ノ尾古墳群』北九州市教育委員会
- 児玉真一 1980 『若宮・宮田工業団地関連埋蔵文化財調査報告書』第3集 福岡県教育委員会
- (22) 註10, 12に同じ。
- (23) 土生田純之 1988 「古墳と土器」『季刊考古学』第24号 雄山閣

報告書一覧

1 『鋤崎古墳』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集	福岡市教育委員会	1984
2 『丸隈山古墳Ⅱ』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集	福岡市教育委員会	1986
3 『釜塚』	前原町文化財調査報告書第4集	前原町教育委員会	1981
4 『浦谷古墳群Ⅰ』	宗像市文化財調査報告書第5集	宗像市教育委員会	1982
5 『宇美観音浦』		宇美町教育委員会	1981
6 『相原古墳群』	宗像町文化財調査報告書第1集	宗像町教育委員会	1979
7 『城ヶ谷古墳群Ⅱ』	宗像市文化財調査報告書第8集	宗像市教育委員会	1985

追記

校正段階で老司古墳の報告書を入手することができたが、時間的余裕もないので、別の機会に検討したい。

『老司古墳』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集 福岡市教育委員会 1989